



人間文化研究機構地域研究推進事業
「現代インド地域研究」

RINDAS

The Center for the Study of Contemporary India, Ryukoku University

龍谷大学現代インド研究センター

RINDAS ワーキングペーパーシリーズ 23

南インド農村における農村経済調査を振り返って —アビニマンガラム村の事例から—

中村尚司



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター・現代インド研究センター
The Center for the Study of Contemporary India, Ryukoku University



研究テーマ：「現代政治に生きるインド思想の伝統」
The Living Tradition of Indian Philosophy in Contemporary India

現代インドのイメージは、かつての「停滞と貧困のインド」、「悠久のインド」から、「発展するインド」へと様変わりした。激変する経済状況を支えたのは、相対的に安定したインドの「民主主義」政治である。興味深いことに、現代政治・経済を支える人々の行動規範や道徳観の根底には、「民主主義」などと並んで、サティヤ（真実／真理）、ダルマ（道徳性／義務）、アヒンサー（非暴力）など、長い歴史に培われてきたインドの思想やその世界観が横たわっている。

本プロジェクトでは、龍谷大学が創立以来 370 年に渡って蓄積してきた仏教を中心としたインド思想研究に関する知識と史資料を活かし、近年本学において活発化している現代インド研究を結合させる。「現代政治に生きるインド思想の伝統」というテーマにもとづき、下記のように二つの研究ユニットを設けて現代インド地域研究を推進し、プロジェクト活動を通じて、次世代を担う若手研究者の育成を図っていく。

研究ユニット1「現代インドの政治経済と思想」

研究ユニット2「現代インドの社会運動における越境」

RINDAS ワーキングペーパーシリーズ 23

南インド農村における農村経済調査を振り返って

—アビニマンガラム村の事例から—

中 村 尚 司

はしがき

1. 農村経済調査の試み
2. 発見学としてのフィールドワーク
3. 調査村の選択

補論 1

「紅茶の市場構造」（『アジア経済』1970年7・8月号）を読んで

補論 2

「紅茶の市場構造」問題小委員会の活動について

付録 1 1960年代に撮影した調査の写真

付録 2 農村調査のために用意した質問票

南インド農村における農村経済調査を振り返って

—アビニマンガラム村の事例から—

中 村 尚 司

はしがき

1961年にアジア経済研究所に就職した筆者は、南アジア経済研究の担当を命じられた。航空便で南アジアの新聞や雑誌を取り寄せ、行ったことのない地域の経済事情を勉強し始めた。開発経済学に加えて、ヒンディー語や農村調査の研修も受けた。

とりわけ、プランテーション農業と移住労働者問題に関心を持ち、そのテーマで研究論文を発表しているインドやスリランカの経済学者と文通も試みた。東京で入手できる文献を手がかりに、中村尚司「セイロン島におけるプランテーション農業の成立」(『アジア経済』第5巻第1号、1964年1月号所収) 1964年に刊行されているが、その前年の夏には完成し、いろんな師友に読んでもらい、批判を受けた。自分の足や目で確かめたことのない農業生産のあり方を論じるのは、現実感がなく心もとなかった。

とにもかくにも、南インドやスリランカへ足を運び、農村社会を観察することから始めようと考えた。初めて日本を出国したのは、1965年の夏であった。振り返ると、およそ50年の歳月が経過している。この50年間に、農村社会もプランテーション農業も大きく変貌した。言うまでもなく、観察者である私自身の見方や考え方も、ずいぶん変わった。当時用いた調査票や、撮影した農村風景も、今から見ると、色褪せている。なにかの参考になればと思い、回覧に供する。

著しく変わった分野を概括すると、およそ次のとおりである。

村落内人口と職種の増加。農業労働者の賃金も増加した(日給; 男150ルピー、女100ルピー、住み込みだと月額4千ルピー)。出稼ぎ先も、USA、UK、カナダ、湾岸諸国、マルデイヴなどへと多角化している。給水塔を用いた水道事業、戸別の便所建設も進む。村内大学の情報学科を卒業すると、月収1万5千ルピー、大学教員だと月収2万ルピーになる。

消費生活も変わった。ゴバル・ガスが衰退し、代わってLPGガスが普及した。無利子の金融(カイマート)と頼母子講(シートウ)が消滅した。村内の携帯電話数は500台を超えた。米菓は50年間で25~30倍の増加し、水田の地価は50~60倍に上昇した。雑貨店は、5店から10店に増えた。TV受像機は258台、電動ポンプが47台、バイクが60台、自転車が114台になった。

ST・SC教育が進展し、村内にあるネルー記念大学の大学生は、3千人を超え、経済、経営、理工研究科は、博士課程まで設置されている。学内に400台のコンピューターを設置し、米国のLason社から、通信衛星でアウトソーシング事業を受注している。学生数の50%以上は、SCとSCである。村長も、パンチャーヤト議長もSCの女性である。アンベードカル教から仏教への転換が進んでいる。

50年を経ても、ほとんど変わらない村の暮らしがある。他方、著しく変化した分野もある。変わらない暮らしを概括しておこう。異カースト間の通婚事例が、まだ存在しない。カースト単位の居住区も変わらない。アールナードゥ・ヴェラーラの長老による村内裁判の慣行も継承されている。スリランカ、マレーシア、シンガポールとの交流も続いている。カースト内の相互扶助、カースト間秩序も変わらない。

M. Phil. 課程以上まで進学したのは、指定カースト住民だけである。とはいえ、村内の社会的な地位と消費水準は、村外、県外、州外、国外との経済関係が決める。全体として、農業従事者の地位が低下し、農地の不動産価値への関心が高まった（脱農家）。

最初の調査後、南インド農村の調査報告は、数回分に分けて、『アジア経済』誌に投稿した。しかし、編集委員会の評価は低く、採択されなかった。偶然、巨額の研究費を使って紅茶の市場構造を調査した研究報告が、同誌に掲載されているのを目にして驚いた。内容は、スリランカの経済学者の論文と瓜二つだった。そんな論文が掲載されて、自分の足で歩いた調査報告が没になるのは、不条理だと思い、批判した文章を編集委員会に送った。その批判文は公表されなかったが、私自身の報告論文は掲載してもらえることになった。

アビニマンガラム村の農村経済と移住労働について、その後英文と和文の双方で、出版することができた。Accumulation and Interchange of Labor, Institute of Developing Economies, 1976、および『共同体の経済構造』（新評論刊、1976年）である。

1. 農村経済調査の試み

私が20歳代前半に最初に行なった農村調査の対象地は、日本の新潟県西蒲原郡月潟村であった。といっても、アジア経済研究所の仕事の一環として、後に南アジア地域で農村経済調査を実施したいと計画していたので、準備作業のようなつもりであった。その月潟村の調査については、アジア経済研究所内資料として、たびたび報告書をまとめた。拙著の『豊かなアジア貧しい日本—過剰開発から生命系の経済』（学陽書房、1989年）にも、その報告概要を巻末に付した。ここでは、主として南インドの村落調査の体験に限定して述べる。

南アジア農村の経済調査に取り組んだ20歳代半ばの頃、私は職業的な調査マンだった。象牙の塔にこもって、学問研究に専念しようとは考えていなかった。取引企業の業績調査をする興信所のようなやり方で、丹念に調べることを職業的な任務にしていた。調査と研究との区別はむずかしい。しかし、あえて研究というのなら、調査に始まり調査に終わるような研究をしよう、と私は心がけていた。

初めて日本を出国した1965年8月、インドとパキスタンの戦争が勃発した。コルコタのダムダム空港が東パキスタンに対抗する軍事空港に転用され、民間航空機は着陸を許可されず、バンコクで足止めになった。その期間を利用してカンボジアのアンコール・トム遺跡群を訪れることができたのは、不幸中の幸いであった。最初に上陸できる民間航空機に搭乗して、コルコタ市に滞在した。しかし、戦時下の灯火管制が厳しく、特に外国人の行動は著しく制約された。

農村にまで戦争の影響は及んでいないだろうと期待して、マディヤプラデーシュ州のカンドゥワ近郊の綿作農村を訪ねた。数日後の朝、農家を訪ねていたところ、警察署に呼び出され、パキスタンを支持する中国政府の工作員と疑われ、即刻カンドゥワ地区から退去するよう求められた。身柄を陸軍憲兵隊に引き渡され、「パタンコット急行」という軍用列車に乗

せられた。ニュー・デリー駅までの約30時間、停車駅ごとに軍人が乗り込み、「ハマーレ・デーシュコ・ジンダバード（インドの勝利万歳）」という歓呼の声に送られた。

日本大使館に行き、「中国政府の工作員」との疑いは晴れたが、急いで戦時下のインドを離れ、スリランカに赴いた^(注1)。スリランカでは、ペラデニヤのセイロン大学に経済学研究科の大学院生として在籍した。1953年に設立された大学であり、大学院制度はまだ整備されていなかった。教員の大半は、欧米に留学して修士や博士の学位を取得していた。私自身も、学位の取得に関心がなく、大学の近郊農村で経済調査を試みた。その調査報告は、アジア経済研究所の刊行物などで行った。

熱心な読書家とはいえ私の場合、書物を読んで理解する農村経済よりも、自分の足で歩いて調べる方が身につく。とりわけ、永続的発展や内発的発展のような、総計データの解析などに頼るよりも、発展の担い手の当事者の声を重視する調査には、収穫の多い方法である。対象地域内の物質循環、経済活動の多様性、社会関係の展開などは、地域の一員として暮らすことによって、初めてわかることが多い。国民経済や国際経済などのマクロ的な経済条件のもとで、経済的な自立をめざす地域住民の内発的な営みを知るには、フィールド・リサーチがもっとも有効性を発揮する分野であろう。実態調査の積み重ねが、社会科学のあり方を変え、そのフロンティアを開く鍵を提供してくれる。

1967年1月から4月にかけて、私はタミル・ナドゥ州ティルチラパッリ県において、農村の経済調査を行った。再度インド農村を訪ねることができたのは、スリランカに在住して1年4ヶ月後だった。振り返ると思い出の多い村であり、それまでの調査地に劣らず多くのことを学んだ。南インドのティルチラパッリ県ムシリ郡アビニマンガラム村を中心とし、その農村経済に関連する諸機関の所在地である。最初の調査に要した滞在期間は、およそ100日間である。その後も同村をたびたび訪ねたり、6ヶ月以上も長期滞在したりしているが、まず第1回目の調査経験に限定して述べる。

研究テーマは、スリランカ中央山地において紅茶生産に従事するプランテーション労働者の経済生活を、出身地の農村経済と比較することであった。調査地域に選定したタミル・ナドゥ州カーヴェリ川北部の農村地帯は、19世紀後半から継続的に多くの出稼ぎ労働者を送り出してきた。当時の私の身分は、日本側から見るとアジア経済研究所の海外派遣員であり、南アジアではセイロン大学経済学研究科に在籍する学生だった。

研究テーマにフィールド・リサーチが必要だったというよりも、むしろ現地調査を行いたためにこのようなテーマを選んだというのが正直なところである。当時の私は、現地調査以外に研究を考えない人間だったから、フィールドワークなしの研究というのは成り立たなかった。セイロン大学に留学する前から、私はスリランカのプランテーション農業の成立過程に強い関心を持ち、セイロン大学の経済学者とも文通をしていた^(注2)。

1) 中村尚司「南インドの村落調査をめぐって」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『南アジアの大河流域における農村社会の研究、共同研究プロジェクト報告、南アジア農村社会の研究第2号』所収、1978年刊)を参照。Nakamura, H., *Disintegration and Reintegration of Rural Society in the Process of Agricultural Development: the second survey of a South India village*, ILCAA, Tokyo University for Foreign Studies, 1982.

2) 中村尚司「セイロン島におけるプランテーション農業の成立」(『アジア経済』第5巻第1号、1964年1月号所収)を参照。Nakamura, H., *Rural Economy in the Wet Zone of Ceylon*, Institute of Asian Economic

紅茶やゴムのプランテーション地帯を訪ね、生産の現場を調査したいと考えていた。機会があるごとにウエット・ゾーンにある大規模茶園を訪ね、プランテーション労働者をインタビューした。すると、労働者の大半が、南インドのカーヴェリ川左岸農村から移住してきたというタミル人であることがわかった。当時、スリランカの大規模農園は、ロンドンにて登記されているスターリング会社の所有に帰するものが多く、実際の経営はコロomboに本社を置く経営代理会社 Agency Houseに委託されていた。コロomboで登記されているルピー会社所有のプランテーションについても、所有と経営の分離は同じ方式がとられて、やはり経営代理会社にゆだねられていた。個々の農園の経営は、この代理会社から派遣されている経営管理人 Superintendentによって行なわれていた。プランテーションの経営は、軍隊組織に似たピラミッド的な体制をとっているため、外部の人間が立ち入ることを好まない。

日本人留学生として経済調査の希望を伝えると、断わられたり、本社に問い合わせるからという理由で、返事がもらえなかったり、施設の見学さえ容易ではなかった。さいわい1965年11月と1966年9月の二度にわたって、日本から紅茶の買い付けに来た業者団体の案内人をひきうけて、質の良い紅茶を産出する中央高地の大規模農園を十数カ所訪ね、リプトン社の農園等に泊めてもらいながら、企業的大農場についての現場感覚を得ることができた。その機会に、南インドからの移住労働者に面接調査を試みた。

経営管理人は外来者が労働者の居住区（ラインlineと呼ばれる長屋形式の住宅が集中している）に入ることを好まない上に、私のシンハラ語もこみいった話ができない状態だったので、出身地を聞く程度のことでおわっていた。標高の高いところの立地し、高級茶を生産している“Great Western”，“Uva Highland”，“Aislaby”，“St. James”，“High Forest”，“Dambattenne”など、スリランカの代表的な茶園では、労働者の95パーセント以上が、南インドからの移住労働者であり、それもティルチラパッリ県のカーヴェリ川左岸の諸タルク Talukの村から来た労働者が多い。

そこで、これらのプランテーション労働者を大量に送り出した農村において実態調査を行ない、プランテーションの地帯の周辺に展開するシンハラ人の米作農村と比較研究することを、留学中の主たる研究テーマに決めた。その後、経営代理会社には委託しない小規模農園（個人所有が多い）を訪ね、シンハラ人労働者やスリランカの市民権をもつタミル人労働者が少なくない事実も確かめた。シンハラ人は南インドのタミル人よりも怠け者である、という俗説では説明できない事情が、大量の移民労働者を創出したとすれば、それは何か。南インド村落調査の必要がいっそう強く感じられた。指導教授のGunasekera氏の助言もあり、村落調査の質問事項を整理してインドへ行く準備をすすめた。

日本農村やスリランカ農村での経験から、出発前の時点で理論、仮説、調査フレームワークなどはなるべく構築せず、手ぶらで行きたかった。しかし、指導教授だったProf. H. A. de S. Gunasekeraが、「そんなことでは駄目だ、ちゃんとフレームワークを作りなさい」とか、「詳細なクエスチョネアを用意しなさい」と言う。あまり気が進まないまま、無理に準備作用の報告書を書いたり、予備的な調査票を作成したりした。クエスチョネアはいろいろ手を入れ、最終的な形にしたFINAL SCHEDULEは、この調査の英文報告書の付録として掲載し

↙ Affairs, Tokyo, 1967.

ている。参照していただきたい^(注3)。

現地調査に必要な資金は、贅沢すぎるほどアジア経済研究所から送金してもらっていた。それにインドやスリランカでは、ひとたび村に住み込むと、費用はあまりかからないものである。インドでなくてもインドネシアやマレーシアでも、調査許可を取るのが大変めんどろで時間のかかる仕事である。私の場合、政府の調査許可を得るのに神経を使い、人並み以上に苦勞した。1965年9月に、調査許可なしで村落調査を試み、中断せざるをえなくなるという苦い経験があったからである。それ以来、無許可の調査はやめようと思っていた。

セイロン大学で同じ寮に住み学生運動をしていた友人を通じて、私はスリランカの共産党左派と右派と同数ずつぐらいつきあっていた。左派の指導者というより中国派とでもいうべきT. Gunawardaneは、印中国境紛争の結果、インドから入国を拒否されていた。そんな事情から、彼女に頼まれて、インドから資料を運んで届けたりしたこともある。

逆に、共産党右派というよりソ連派とでもいうべき人たちには、調査許可を取得する上で、ずいぶん熱心に助けてもらった。一番有効だったのは、ソ連派共産党系の週刊誌Tribuneの編集長であるS. P. Amarasingamが、インドのマドラス州（現タミル・ナードゥ州）政府内務省のK. Venkatraman宛に書いてくれた推薦状であった。このVenkatramanという人は、実はインド公安警察の幹部で、在コロンボインド大使館にも勤務経験がある。彼がスリランカの共産党工作を手がけていたときの工作対象者のひとりがAmarasingamである。その紹介ということで、調査許可を発給する手続きの便宜をはかってもらった。予期していた以上に事務処理がスムーズに運んだ。

Venkatraman氏の指示に従い、日本の総領事館経由で当時のマドラス州政府に調査許可の申請書を送る手続きをとった。返事が来るまで少しインド旅行を試みようとして、マドラス、ハイデラバード、ボンベイ、ニュー・デリー、ラクナウ、カルカッタ、マドラスという順でインド半島を列車で一周した。

スリランカ国内でのネットワークは、大学の寮に住んでいた友人や知人を通じて形成した。1964年にシャーストリ・バンダラナーヤカ条約が締結され、インド政府は52万5千人のプランテーション労働者をインド市民として引き取ることが定められていた。そんな情勢だったので、プランテーションの労働組合組織を訪ね歩き、調査協力をお願いをした。

スリランカからの帰国労働者の受入れをどのようにするかは、インド政府にとって焦眉の課題であるはずと考え、ニュー・デリーへ赴いた時に、労働・雇用・入植省Ministry of Labour, Employment and Rehabilitationを訪ねた。海外からの帰国インド人の受入れ事業を担当しているのは、入植局であり局次長Deputy SecretaryのU. P. Bhatt氏とその補佐官Under SecretaryのR. S. Saksena氏にいろいろと質問したが、スリランカから帰国するインド人にはあまり関心をもたず、まして具体的な施策などは全くないということであった。ビルマや東パキスタン（当時）からの難民の受入れに忙殺されていて、とてもスリランカのプランテーション労働者には手がまわらない様子であった。「セイロンから送還されてくれば、日本軍

3) Nakamura, H., *Accumulation and Interchange of Labour: an inquiry into the non-market economy in a South Indian village*, Institute of Developing Economies, Tokyo, 1976.

中村尚司「南インドの村落社会と海外移住」、辛島昇編『インド史における村落共同体の研究』、東大出版会、1976年刊に所収。

が占領していたアンダマンやニコバルにでも行ってもらうよりほかない」と、日本人の私に皮肉をこめていっているのか、冗談とも本気ともつかぬ表情で答えてくれるだけである。

現在から振り返れば、条約だから直ちに文言どおり実行されると思い込んでいた私が間違っていた。両国政府とも、条約のとおり実行する考えはなかったようである。両国の市民権問題が最終的に解決したのは、21世紀になってからである。その後スリランカにおける民族問題は多様な展開をしているが、別の機会に詳しく論じている^(注4)。

このニュー・デリー旅行には2つの収穫があった。ひとつは、ウツタル・プラデーシュ州の農村調査を終えたばかりの長崎暢子氏に、南インド農村調査に協力してもらえることになったことである。つぎに、タンジャーウール県（ティルチラパッリ県の東隣り）の村で調査をする準備をしていたR. Jayaraman氏（当時デリー大学社会学科講師）に会い、南

インド農村調査の手ほどきをしてもらえることになったことである。Jayaraman氏は、私の数年前にセイロン大学に留学し、プランテーション労働者の事態調査を実施している。デリー大学へ提出されたPh. D. 論文のコピーを同氏から借り、カルカッタ経由でマドラスへ帰る列車の中で読んだ。この論文は、プランテーション労働者の出身村を調べようという私の計画とは逆に、スリランカでの生活条件の方から同じ問題を考察したものであり、啓発される点が多かった^(注5)。

インド一周の旅から戻ってきたら下に掲げる許可書が出ていた。警察につかまってもそれを差し出せばすぐに釈放してもらえる、という非常にありがたい許可書なので、調査が終わるまで後生大事に持っていた。調査許可の公文書（1月19日付）は、ティルチラパッリ県知事Collector宛に出されたものである。そのコピーが警察等の関係部局に配布されているので、い



No.240/67-1
Public (Political) Department
Fort St. George, Madras-3
Dated the 19th January, 1967.

OFFICE MEMORANDUM

Sub:- FOREIGNERS - Mr. Hisashi Nakamura of the Institute of Asian Economic Affairs, Japan - Conduct of Socio-Economic Survey in Tiruchirappalli District in February, March '67.

....

Mr. Hisashi Nakamura of the Institute of Asian Economic Affairs, Japan, has come to Madras State to make a socio-economic survey of South Indian villages in the Masiri and Perambalur Taluqs of the Tiruchirappalli District. He will be visiting the villages between February and March 1967.

2. Mr. Hisashi Nakamura, being a Foreigner, is new to the rural areas selected for the survey. The Collector of Tiruchirappalli is requested to issue necessary instructions to the local authorities to extend to him necessary facilities (not involving expenditure) and allow freedom of movement to conduct his survey freely.

F.J. Vaz,
Under Secretary to Government.

To
The Collector, Tiruchirappalli.

Copy to:-

The Inspector General of Police, Madras-4.
The Deputy Inspector General of Police, C.I.D., Madras-4.
The Superintendent of Police, Tiruchirappalli.

4) JBIC Project on "Conflict and Development: The Role of JBIC" Development Policy and Project Assistance Survey on "Development Policies and Reconstruction Assistance in Sri Lanka" Conducted by a Ryukoku University survey team led by Professor Hisashi Nakamura Kodikara, S. U. "Indo-Ceylon Relations since Independence", Colombo, Ceylon Institute of World Affairs, 1965.

ろんな点で好都合であった。

予備調査で質問表をテストする時間的な余裕がないので、さまざまな可能性を考え23ページに及ぶ大部の質問表を作成し、タイプ印刷で200部用意した。マドラスに来たJayaraman氏に見せると、「大部すぎるので調査報告書かと思った」とからかわれたものである。事実、23ページもの質問は農家にとっても過重すぎるので、かなりの部分を省略せざるを得なかった^(注5)。私のように記憶力の悪い人間は質問表なしに調査すると、抜けたところが多くなるので不可欠である。しかし、その後の経験からいえば、3～4ヶ月の調査期間であれば、悉皆調査の場合、どんなに多くても15ページを越えない方がよいと思われる。質問表の作成とともに、通訳をさがすのにもかなりの日数をついやした。

受け入れの研究機関であるマドラス大学には、セイロン大学から紹介してもらった。マドラス大学のカウンセラーに会い、月額800ルピーで3ヶ月アルバイトをする学生を紹介して下さい、とお願いした。旅費や食費を除いて800ルピーという報酬（セイロン大学講師の初任給）が、普通のアルバイトよりも良かったのであろうか、成績優秀な学生ばかり8名（M. A. second class, upper division以上の資格をもつ）も面接に来ておどろいた。南インドに強かった反バラモン運動のあおりをうけて、マドラス大学ではバラモンの卒業生が、成績優秀でも就職難に直面していた。そんな事情や学生を紹介してくれたカウンセラー自身がバラモンだったということも重なり、8名の全員がバラモンだった。「ティルチラパッリ県の農民の言葉がわかる人ならだれでもかまわないが、下層カーストやハリジャンの家も訪ねて、一緒にお茶を飲むようなことをしてもらえないでしょうか」という私の間に、その場でできないと答えた学生も、できると答えた学生もいなかった。兄に相談しますとか、父親の意見をきいてみますというような保留の仕方、最終的には全員からことわられてしまった。

マドラス大学で探すことはあきらめ、伊藤正二氏（アジア経済研究所）に紹介されていたM. Bazlulla氏（弁護士になるための修学中）にお願いすることにした。同氏の母語がウルドゥ語である点や、ヒンドゥ教徒でない点が、タミル語を母語とするヒンドゥ教徒の村の調査にむかないのではないかとためらわれたが、結果としては非常に良かった。スリランカと往来していた。10年以上もスリランカに暮らした経験のある村民が数十名もいる村だったので、Bazlulla氏のタミル語の足りない点は、後でシンハラ語を話す村民からチェックすることができたからである。また、カースト間の微妙な対抗関係も、当事者たりえない異教徒である同氏の方が、どちらかといえば公平な見方ができるという利点が生じた。Bazlulla氏との3ヶ月の共同生活を通じて、私の学んだことがらは少なくなく、同氏は私にとって通訳というよりインド生活の教師である。

2. 発見学としてのフィールドワーク

フィールド地域に関する事前の情報収集は、あまり熱心にしなかった。月潟村の調査をした時には、用意周到に情報を集めた。日本農村に関しては資料が山ほどある。しかし、その

5) 論文の題目は“Caste, Kinship and Religion among Indian Tea Estates Labourers in Ceylon”であり、1975年にボンベイで公刊された。

Jayaraman, R. “Caste Continuities in Ceylon ; a study of the social structure of three tea plantations”, Popular Prakashan , Bombay, 1975.

ときの経験から、フィールドに関する情報収集はしないほうがよいという結論に達した。逆に、予備知識をあまり持たずに現地に行って、そのフィールドから何かを発見してくるほうがよい。フィールド・リサーチというのは仮説を検証するために行なうのではなく、その調査で問題を発見するためにフィールドへ行くべきであろう。そんなわけで、事前にはあまり準備をしないほうがよい、というのが私の意見である。

現地の通用語であるタミル語は、残念ながらほとんどできなかった。幸いにもスリランカからの帰国労働者がたくさんいたので、スリランカの公用語であるシンハラ語でインタビューができた。スリランカと往来していたり、10年以上もスリランカで暮らしたりした経験のある村民が数十名もいる村だった。タミル語通訳の足りない点は、あとでシンハラ語を話す村民から補完した。

セイロン大学に留学した当初は下手な英語を話していたが、3ヶ月経ったところで日常会話には英語は使わないと決心した。スリランカに住む日本人の場合、英語ができないのはその頃の常識だったから、何の疑問も持たれないでシンハラ語だけで暮らしていた。言語によって差はあろうが、その言語環境で暮らせば、3ヶ月くらいで日常生活に必要なコミュニケーション能力を身につけることができるのではないか。

現地での政府関連機関へのアクセスは、積極的に行なった。ホテルに荷物を置くやいなや県庁へ行き、知事と県警本部長とに挨拶することから始めて、その土地の主な官公庁や関係機関にひととおり顔をつないでおいた。県農業部、県記録室、弁護士会、ムシリ郡役所、セイロン栽植企業経営者協会のインド沿岸支部、県内のマハーラージャ、郡内のザミンダール、大土地所有のヒンドゥ寺院、隣村の高等学校などである。

インタビュー形式の調査は、村内の社会的な関係を把握する方法を重視した。標本抽出調査というのは、この社会関係に切れ目ができるから、住民相互の関係を知ることが非常にむずかしい。丸ごとお互いにクロス・チェックできるように、その地域の住民全員に当たることが望ましい。「昨日聞いたお隣の人の話は本当なのか」と尋ねることができる。

例えば、地主で土地を貸している側と、小作人で借りている側の双方に同じ質問をする。あるいは、小作人が農業労働者を雇っている場合も、その双方の当事者から話を聞き、労働条件や小作条件について確認するという方法を採用した。特定のVIPとかそういう人を選ぶのではなく、村に住んでいる人は全員インタビューの対象にする。たかだか200軒足らずの村だったから、そういうことが可能だった。

調査期間中は村の中に住んでいたのも、現地で利用した主な交通手段は2本の足だった。村では、スリランカのキャンディ市へ出稼ぎに行き留守になっている家を借りたので、家賃はほとんどタダ同然だった上に、スリランカへ戻ったのち補足調査を行なう上でも好都合だった。若かったのも村の中を実によく歩いた。ときどき自転車も使った。もちろん、遠くへ出かけるときは、必要に応じてバイクもバスも鉄道も乗用車も利用した。農村調査をするに際して、特定の交通手段だけに限定する必要はない。

情報の整理方法、管理方法、資料送付方法などは不得手で、失敗ばかりしている。調査をすると、非常に雑多なデータが集まるが、その整理がうまくできない。インドの調査だけではなくスリランカ調査の場合も、せっかく集めた資料の半分も活用していない。

村の中での暮らしは、なるべく村の人たちと同様にするよう心がけた。たいした貴重品も持っていなかったから、セキュリティ対策は特に考えなかった。掃除、洗濯、入浴などは、

近隣の人々の真似をして全部自分たちでやっていた。健康管理にもあまり気を使わなかった。ただ、村で天然痘が流行していたので、インタビューに躊躇したこともある。予防接種をしていたから伝染する心配はまったくなかったが、40度も熱が出てうなっている人の枕もとに行き、執拗に質問をするのは気が引けた。しかし、帰る日までに全員にインタビューをしたいと考え、無理に強行した。今から思えば、ずいぶん残酷なことをしたと反省している。

フィールド・リサーチの結果、出発前の理論・仮説・調査フレームワークなどが大きく変わった。日本の村の調査経験は、ほとんど役に立たない。そのことは拙著『共同体の経済構造』（新評論、1975年）にも記しておいた。この調査報告はセイロン大学に提出する必要があるだったので、最初に英語でレポートを書いた。しかし、集めたデータの分析ならともかく、理論的な仮説とか方法については英語ではうまく書ききれなかった。

どうしても日本語で論議せざるをえなくなって、書いたものをアジア経済研究所に次々と雑誌論文として投稿した。しかし、全部没になり掲載してもらえなかった。編集委員会が没にするくらいだから、自己評価としてもあまり芳しくない出来だった。とはいえ、私にとって最初のインド村落調査の結果だから、なんとか活字にしてほしかった。

運良く、その頃アジア経済研究所の機関誌『アジア経済』に問題論文を発見した。ある大学の教授が、スリランカ人研究者の論文を丸写しにして、出典を明らかにせず自分の名前で発表した論文が掲載されていた。こんな不屈きな論文を掲載して私の書いたものを没にするとは何事か、と編集委員会に抗議文を投稿した。抗議文のほうは掲載されなかったが、代わりに没になっていた原稿が日の目を見ることになった。そんな事情を背景にして、『アジア経済』誌にいくつかの報告論文を発表し、のちに『共同体の経済構造』にまとめた。このワーキングペーパーの場を借りて、補論として『アジア経済』誌に掲載されなかった〈「紅茶の市場構造」(『アジア経済』1970年7・8月号)を読んで〉を取める。

フィールド・リサーチの持つ意味・意義（特に少壮時での経験）は、フィールドから学ぶという点に尽きる。職業的な調査マンとして生きるようになって何年か経たのちに、歩く民間学の鶴見良行に出会った。「中村さん、学問というのは歩いて見て聞くよりほかにないんだよ」という。それを私は「民際学」と呼び、その立場から当事者性の科学の試みを行なっている。『人々のアジア—民際学の視座から』（岩波書店、1994年）はそのような試みの一つである。

要するに、民際学だとか、当事者性だとか、一人称の科学だとか考えるのは、すべてフィールドの話に由来する。いずれ、一人称で学問をすることの意味とは何かをもう少し徹底的に突き詰めてみたい。そういう意味で、フィールド・リサーチの経験について、70歳代になってもあいかわらず、ああでもない、こうでもないと反芻している。

アジア経済研究所を退職する前年、『アジア経済』誌の1983年9月号に「アジア認識と戦後責任」という題で、吉岡昭彦著『インドとイギリス』（岩波書店、1975年）という本の書評論文を発表した。そこでの主な論点も、フィールドから学ぼう、フィールドの当事者として見ようと、社会科学者の当事者性を考察することであった。これにも因縁があって、もともとは岩波書店の『思想』という雑誌から書評論文を書いてくれと注文を受けて書いたものである。岩波新書で出ているインドに関する本は感心しないものが多いけれども、これは特にひどい。この書評論文を書いて編集部に渡したところ、岩波書店で出した本を一から十まで駄目だといわれては困るので、「せめて、8割は悪くても2割ぐらいは良い点がある、と

書いてくれませんか」という。

編集部としては依頼原稿を没にするわけにもいかない、と悩んでいた。私は 商人の俸だから他人の商売を邪魔するようなことはしたくないと思ったので、「少しこの本が売れてほとぼりが冷めた頃に活字にしましょう」と引き取った。この書物がよく売れて版を重ねていた1983年になって、ようやく活字にしてもらった。

この書評論文の冒頭にも紹介したが、現地調査をしている村の人人との付き合い方というのは、大変むずかしい。その頃インドとパキスタンとの戦争の影響もあって、官公庁や図書館では調査村の地図をいっさい貸せない、と言われていた。たとえ正確とは言えなくとも、自分で地図を作るよりしようがなかった。ブランドン・コンパスとかペドメーターとかを持って、その村の周りを何回も歩きながら、その地図を作っていた。近くの村の人がやってきて、「日本軍が侵略するのに必要な地図を作っている」と言われた。

日本軍は南インドまで攻めてこなかったのに、地域住民がそう受け取るとすれば、戦争の傷痕はここまで残っているのかと考えさせられた。調査をする当事者である私が考えている調査目的とはまったく別個に、村の人はまるで違う解釈をすることがある。

調査者が調査対象からデータを集めようとする一方的な関係にとどまる限り、両者の溝を埋める手立てはない。その両側に架ける橋はないのだろうか。私にはいくらかの経済的な余裕があったので、村の大工さんに発注して、小学校の教室に生徒が座るベンチを帰る前日に寄付した。その後も、小学校の備品の寄付を続けている。しかし、それも一方通行に過ぎない。

通訳をしてくれたBazlulla氏や裕福な村民が二家族も相次いで来日し私を訪ねてくれたときは、本当にうれしかった。調査者と調査対象との間に生活者としての交流が始まれば、その分だけ学問研究の特権性が剥奪されてゆくに違いない。社会経済調査の専門家と被調査者との壁が崩壊する日は夢のまた夢としても、地域住民大衆とともに暮らすフィールド・リサーチならば、その壁をいくぶんなりとも低くする方法を考えるべきではなかろうか。

3. 調査村の選択

缶詰などの保存食料、医薬品、文具などを買い、スーツケースにつめ込んでティルチラパハリ行の夜汽車に乗る。戦時中、マレー半島で働いていたという乗客と一緒にになり、日本軍がどのような残虐な行為をしたのか、という話を聞かされる。日本人の私を見て古い話を思い出したそうである。タミル・ナードゥ州を旅行すると、時々こういう体験をすることがある。

ホテルに荷物を置いて、県庁Collector's Office^(注6)へ行き、知事と県警本部長District Superintendent of Policeとあいさつをする。調査計画と調査村の選定基準（移住労働者の出身地、100～150戸の米作農村、土地改革の実施された地区、多カースト構成等）を説明すると県農業部長District Agricultural Officerを呼び、ムシリ郡の2、3のブロックをジープで案内するよう指示を与えはじめた。知事のChokkalingam氏と県警副本部長のBangara氏の厚意で、いろんな便宜が与えられ、効率よく調査をはじめることができた。ティルチラパハリ市にはセイロン栽植企業経営者協会の支部Coast Agency of the Ceylon Planters' Associationが置かれ、

6) 植民地時代から南インドの県知事はcollectorという名称を用いている。一方、同じ英植民地だったスリランカでは、Agentを県知事の名称として用いる。

英領時代の移住労働者雇用事務の残務整理と帰国労働者への年金支払い業務等を行なっている。コロomboの本部から手紙を出してもらっておいたので、この支部にある資料も利用させてもらうことができた。支部長のCarthegesan氏に対してインド政府は外交官と同等の待遇を与えている。植民地遺制ということを考えさせられる具体例である。

翌日から地区開発官Block Development Officerの案内で、調査村を決めるためムシリ地区の村落をまわる。130戸の集落だということで、そこに決めようと思い、村内を歩いてみると300戸以上もあつたりする。なぜ130戸と村長Village munsifが説明したのか不可解だったが、Bazlulla氏によれば、100～150戸という基準を示したので、失望させないように130戸と返事したのだ、と説明してくれる。戸数が適当な集落だと今度は灌漑地（水田）が少なかったり、農業労働者の世帯が70パーセントもあつたりで、調査村の選定は容易ではなかった。

デリー大学のJayaraman氏が、総選挙（2月18日）を前にした農村内の政治活動に関する調査をしているタンジャーウル県の村を訪ねてみた。タンジャーウル駅で同氏と落ち合い、調査村に案内してもらった。驚いたことには、南インド農村研究で著名なK. Gough氏の調査村でもあった。彼女がいくつかの論文を書くために調査したKumbapettai村については、日本にいる頃から読んだことがあった^(注7)。便所、水道、ガス、電気、風呂等のないこの村に、彼女が2年近く滞在していたことを知って、すっかり感心してしまった。このGough氏の通訳をつとめ、またJayaraman氏の調査助手でもあるバラモンの村民が、「Gough氏からの最近の手紙によれば、ヴェトナム戦争反対運動でいそがしくて、調査報告書として一冊の本にまとめることは、当分できそうにないらしい」と、こともなげにいう。日本とインドよりアメリカとインドの距離の方が短いような錯覚をおこしそうな話しぶりであった。

Jayaraman氏によれば、この典型的なバラモン村の選挙運動はカースト単位で行われていて、他の地区とは異なりバラモン村民がすべてドラヴィタ進歩同盟（DMK）を支持し、非バラモン村民がすべて会議派を支持するという逆転現象がみられるという。しかし、同一カースト内で支持政党が分裂することはないそうである。私には村民の投票行動の分析よりも、調査村の環境の方に大きな関心があり、いかに便利とはいえ報告書がまだ刊行されていない他の研究者の調査村で再調査を行なうことの意味は、聞かずにいられなかった。Jayaraman氏とGough氏との将来の共同調査の一環である、という答えを得てほっとしたものである。

村の中をJayaraman氏の案内で歩きながら、面接調査の仕方、それも不可触民（ハリジャン）に会う時とバラモンに会う時の対応の仕方など、具体的なケースについて実物教育を受け、参考になることが多かった。ただ、調査者がインド人の場合とアメリカ人や日本人のような外国人の場合とでは、村の人たちの応接もずいぶん違っているので、そのまままねるわけにはゆかなかつたことも付記すべきであろう。

タンジャーウルからティルチラッパリに戻り、再び調査村の選定のためカーヴェリ川の左岸を山地の方へ向って、ジープで走りまわった。今回は、ニュー・デリーから応援に来てくれた長崎暢子氏も一緒に村探しを行ない、ハリジャンのためのネルー高校Nehru High

7) Gough, E.K., *Caste in a Tanjaore Village*, Cambridge Papers in Social Anthropology, Cambridge, 1962.

Gough, E.K., "The Social Structure of a Tanjore Village" in *Village India*, McKim Marriot Ed., Chicago, 1955.

Gough, E.K., "Criteria of Caste Ranking in South India", *Man in India*, Vol. 39, No.2, 1959.

School^(注8)のあるPuthanampatti村を中心に、適当な村をみてまわった。そして、ネルー高校の創始者のMookapillai氏のすすめで、となりのAbinnimangalam村を調査することに決めた。Mookapillai氏自身もプランテーション労働者としてマレー半島で働いた経験があり、近在の村からは多くの移住労働者がスリランカとマレーシアに行き、働いているということであった。

調査村が決まったので、ティルチラパッリ市のホテルから村へ移ることにした。はじめは、ネルー高校の一室を借りて住むつもりでいたが、スリランカへ出稼ぎに行き帰国していない村民の家のひとつを借りることにした。私が下宿していたキャンディ市に家主が住んでいる、というので国際電話で了解してもらった。スリランカに戻ってからこの家主を訪ねると、キャンディ市の中心にある大商店の経営者であった。スリランカの国会議員の経験もあるという。こういう資産家の場合は、家族の半分がスリランカの市民権を持ち、残りはインドの市民権を持つというケースがよくある。

村に移り住む前に、県庁の記録室Record Room、ムシリ郡役所Musiri Taluk Office、弁護士会Bar Association等で土地制度に関する資料を探した。県庁の記録室では沢山の公文書の束が、ほこりをかぶったままになっているので、もったいない思いを禁じえなかった。弁護士会では、矢継ぎ早に日本に関する質問を浴びせられた。「日本に鉄の橋はあるか」、「列車は走っているか」、「今でも盗みの現行犯は、その場で手首から先を切り落されるのか」等々。イナムダリー制度に関する資料を借りる必要があったので、ひとつひとついねいに答えたが、実に珍奇な質問が多かった。

いよいよAbinnimangalam村で面接調査を始めようという日になって、プドゥコタイのマハーラージャに招待され、またティルチラパッリ市に逆もどりしたこともある。おかげで、カメラと狩猟にあけくれるマハーラージャの生活の一端を知る機会を得た。現タミル・ナードゥ州で最大のマハーラージャも、ティルチラパッリ市の館はそれほど立派ではない。後にカーヴェリ川を北上して、Thottiyamのザミンダールの所領を訪ねた時に、建物も食事の質もマハーラージャよりザミンダールの方がぜいたくだ、と感じたことがある。しかし、そのあと調査村全体を寺領地として土地改革まで所有していた、Kumbakonam（タンジャーウル県）のカーシ・マツトというヒンドゥ寺院を訪ね、その巨大な穀物倉を見た時には、お寺の方がザミンダールよりも資産家であると、あらためて感じ入ったものである。

それはともかくとして、マハーラージャの招待を受けた翌日から、村の概況の把握に努める一方、個々の農家の面接調査もはじめることにした。限られた日数の中で悉皆調査を行なう場合、よほど余裕を見て計画をたてないと、期限内に完了することが不可能になる。とくに外国人の調査者の場合、村の学校の運動会で商品授与をしてほしいとか、結婚式や葬儀に出てほしいとか、予想外の時間をとられることがある。運動会にしても通過儀礼にしてもそれなりに貴重な見聞であり、村の社会生活を知る重要な手がかりを得ることもある。私の場合、州政府にもスポンサーのアジア経済研究所にも3月末で完了する、という計画を提出していたので、面接戸数の消化と村内外の社会活動への参加とで、ジレンマやあせりを感じたものである。結局、3月末にすべてを終えることはできず、4月中旬のタミル正月まで調査を延長せざるを得なくなってしまった。

8) 当時のネルー高校は、ティルチラパッリ県における不可触民教育の重要なセンターとして機能していた。

村を離れる最後の日に、村の大工さんに注文して作ってもらったベンチを、小学校の教室にならべ、パンチャーヤトの集会を召集してもらって、お礼のあいさつをした。4月の暑さのせいもあったが、疲れきった身体を立たせているのもつらく、今度は調査抜きで村に住みたいと考えたりしていた。Bazlulla氏は私以上に疲れていたはずで、その後も会う機会があると、後半の忙しかった日々がくりかえし話題となった。

補論 1

「紅茶の市場構造」(『アジア経済』1970年7・8月号)を読んで

中 村 尚 司

1. 岩城論文の疑義

日本が経済大国であり、セイロンが貧しい小国にすぎないことについて、私にはひとつの悲しい思い出がある。早稲田大学に留学して日本文学を研究したことのある友人のRさん(セイロン大学文学部講師)が、著名な日本の作家であるM氏の小説と戯曲をセイロンの民衆に紹介しようと、シンハラ語に抄訳して解説を付した上、刊行する計画を持ったことがある。Rさんに頼まれて私は著作権譲渡について手紙の代筆をひき受け、著者をはじめ、文芸家協会等に問い合わせたが、何処からも思わしい返事をもらえなかった。黙殺されてしまったのである。

『アジア経済』7月号の巻頭を飾っていた岩城剛氏の「紅茶の市場構造 (I)」という題字を見た時、これは面白そうだと思いながら他事にかまけて、完結するまで目を通さずにいた。このたび、7・8月号をまとめて読みすすんでいくうちに、アジアの小国に対する蔑視がこのような形で経済学研究者の間にもあるのかとRさんのことが思い出され、悲しいというよりは口惜しくなったものである。しばらく考えている間に、ことは他人事でなく私が10年近く勤めている研究所の機関誌である以上、このような事態を許しているのは、セイロン研究を担当しているものの怠慢であると思ひあたった。とりあえず、最小限の責任を果すためこの一文を記すことにする。

N. Jayapalan及びA. S. Jayawardenaの両氏による‘Some Aspects of the Tea Industry’がセイロン中央銀行の“Monthly Bulletin”に掲載された時、日頃このような論考にはほとんど関心を示さない日刊の商業新聞がとりあげ、セイロン経済の根幹をなす茶産業がひとにぎりの英国人によって支配されている事情をセイロン人自身の手によって明らかにしえたと報道し、話題を読んだものである。茶産業関係企業のデータを丹念に調べあげた両氏の研究成果が、バンダーラナーヤカ夫人を首班とする新連合政府の経済政策——セイロンの紅茶市場を牛耳っている英系代理商社のコントロール——を基礎づけたことは知る人ぞ知るといわれている。

このセイロンの両学究にも、『アジア経済』に論文を寄せた岩城氏にも、私は個人的な面識がない。聞くところによれば、かつてアジア経済研究所が異例の大型プロジェクトとして市場構造に関する調査団を現地に派遣した時、同氏はその主要なメンバーだったそうである。一次産品の流通機構について同じ視点から同じような調査を行なえば同じ結論にたどりつくこともありうると思え、私は両論文を照合してみた。

2. 両論文の類似点

Jayapalan及びJayawardenaの両氏の論文（以下Jaya論文と呼ぶ）は4章からなり、それぞれ前掲誌の1967年6月、8月、10月及び1968年3月号に分載されている。本誌の1970年7月及び8月号に分載された岩城氏の論文（以下岩城論文と呼ぶ）は5章からなりつつ、2ページ足らずの序章と約半ページの結語の章を別にすれば、本論は3つの章で構成されている。

まず、岩城論文は計17におよぶ統計表とひとつの付表を用いているが、これらの全てがJaya論文第Ⅱ～第Ⅲ章の統計表及び付表を加工することも資料としての批判を行なうこともなく、そっくりそのまま用いられている点に注意してほしい。Jaya論文の存在を知らない、あるいは知っているも読んだことのない編集委員や監修者でも、ある研究論文のデータが全て一つの論文からのみ借用されている場合、その独創性に不審の念を抱くのが常である。『アジア経済』の研究論文は独創的であることを要しないというのなら別であるが、少なくとも「創刊の辞」の精神はそういうことではなかった筈である。

次に本論である。岩城論文の第2章は「紅茶の貿易動向」と題されている。これがそっくりJaya論文の第2章‘Features and Trends in the World Trade in Tea, With Special Reference to India, Ceylon and East Africa’に対応する。Jaya論文は各パラグラフに番号をふっているののでそれに即して述べると、はじめの4パラグラフが前章の要約や本章の目的と付表の説明にあてられている。残りの第5～47が本題の論述である。最後の1パラグラフは次章の予告になっている。この5～47パラグラフのうち第23、27、30及び46を除く全てが同じ順序の配列で岩城論文の第2章を形づくっているのである（ただし抄訳）。Jaya論文第2章conclusion（42-47）は、「5. 紅茶貿易の展望」という見出しで岩城論文第2章の結論となっている。

同様にして岩城論文の第3章「紅茶の国際市場」はJaya論文第3章‘Some Observation on “Quality” of Tea Market’と題されている。これが8月号掲載部分のほぼ全体である岩城論文の「第4章紅茶の市場構造」に相当する。ここではひとつのパラグラフも省略されず、全訳に近い抄訳である。構成も全く同じでありJaya論文のconclusionは岩城論文の「5. 独占的市場と生産国の立場」となっている。そして、Jaya論文は最後のパラグラフで、「セイロンと他の生産国とが国益を守るために『カウンターヴェイリング・パワー』をうみ出すことによってとりうる限られた対策」として(a)、(b)、(c)、(d)の4点を提唱しているが、それが岩城論文では「生産国のとれる方策は、かぎられたものであるが、次の様な諸策が考えられる。」として、(イ)、(ロ)、(ハ)、(ニ)、と引用符を記さないまま訳出されている。この対策の当否はともかくも、「考え」たのは誰か。『アジア経済』の読者は、それが岩城氏であると読むよりほかない。

両Jaya氏はこれらの3章を論述するにあたって、計109に達する「注」をつけ、使用した資料の出所を明らかにし、他の著書や論文からの引用については当然のことであるが引用符をつけて引用箇所を明らかにしている。しかし、岩城論文ではそれがはぶかれている。Jaya論文では、他者の見解として紹介している個所まで、あたかも岩城氏自身の見解であるかのように述べられている（例えば『アジア経済』8月号p.27「……かれらはエステート閉鎖まで考えなくてはならないほどであった。）。岩城論文もまたこの第3章で計7ヶ所に「注」をつけ引用の出所を明らかにしている。そのうち5ヶ所までがJaya論文の孫引きであり、例示すれば「各国における詳しいデータはないが、イギリスの『全国食糧調査委員会第14回年次報告書』（The 14th Annual Report of the National Food Survey Committee）が示した分析によっ

て紅茶の消費水準決定要因をみていくことにする（注1）。これによると……」というふうにあたかも岩城氏自身が原資料を検討したかの如くである（『アジア経済』7月号p.16）。残る2ヶ所のうちひとつは引用ではなく本の紹介であり、ひとつは（同誌p.18の注1）、Jaya論文の‘It is likely that blending services are more important function of enabling the blender to keep his retail prices uniform and low by changing the composition of the product’（Jaya, op. cit, p.23, Oct. 1967）を訳出していることが前後の文脈から明らかであるにもかかわらず、1951年に刊行されたWickizerの著書を典拠としている個所である（しかも、Wickizerの引用箇所にはblendingに関する記載が全くない）。

仮りに内容の9割以上が他人の論文の訳であっても、独自の創意にみちた結論があれば、研究論文であるといえるかも知れない。しかし、岩城論文の第V章結語は半ページを少し越える量であるが、Jaya論文の批判やJaya論文に対立するような見解は何もなく、岩城氏の独自の主張として「いままで一次製品の市場構造に関する研究は十分でなかったが、今後多くの商品についてこれらの点が明らかにされるなら、独占的動きに対しても国際的規模においてカウンターヴェイリング・パワーを考えることができるであろう。それがなされなければ、一次産品問題の基本的解決、ひいては、アジア・アフリカ諸国の急速な経済発展をも期待できないであろう。（『アジア経済』8月号p.40。ただし、アンダーラインは引用者。）と結んでいる。これでは両Jaya氏の労苦があまりに不当にあつかわれているといわずにはいられない。このような結語によって重要な一次産品である市場構造が岩城氏自身の研究によって明らかにされたことになるから——岩城論文を英語に翻訳して“Developing Economies”にでも掲載しないかぎり。

たまたま『アジア経済』の研究論文として連載されてしまったが、これは「論文」ではなく、むしろ「資料紹介」欄に掲載されるべきものであり、編集委員会が誤ってとりあつかったものかもしれないと考えなおしてみた。しかし、これが「資料」として紹介されているわけではないことは次の点からみて明白である。

(イ). 岩城論文には、Nalini Jayapalan and A.S. Jayawardena, Some Aspects of the Tea Industry (Central Bank of Ceylon, 1968) と注記（本誌7月号p.4）されているのみで、事情を知らない第三者には利用できない。事実これを読んだ時、最近のセイロンの文献には最もよく通じているつもりのも、とうとう単行本として刊行されるようになったのかと思ったほどである。早速、セイロン中央銀行の調査部にいる旧知のJ氏に問いあわせてみると、刊行する計画もないという答えであった。岩城論文には、これが雑誌論文であることはどこにも触れられていないのである。そのため、統計表の出所の欄にページ数が記されていても、どの雑誌の何月号かわからず、参照しようがない。

(ロ). 「資料紹介」とすれば致命的な欠陥というよりほかない点は、Jaya論文が4章で構成されているにもかかわらず、最初の章（“Bulletin” 1967年6月号掲載部分）については、ひとことも言及されていないことである。残りの3章については前述のとおり、ほとんどパラグラフごとに訳され、岩城氏の論述がほぼ全面的に依存しているので、いっそう奇異である。私が読んだかぎりでは、この第1章は残りの3章における議論を展開するための重要な基礎をなす部分であって、このJaya論文をまとめた「資料」として紹介するのであれば無視することができない筈である。

なお、本稿は岩城論文の批判をめざしていないので、Jaya論文からの誤訳や悪訳あるいは

誤植と思われる点には一切ふれないことにした。

3. 論文掲載の可否

もし、これが無名のセイロン人研究者の論文ではなく、セオドア・シュルツやアーサー・ルイスの如き著名な欧米の研究者のものであれば、岩城氏も『アジア経済』編集委員会もこのような扱いはしなかったにちがいない。この論文は、明らかにアジア・アフリカの研究に対する蔑視の産物である。日本では長い間、欧米偏重の教育が行なわれてきているので、アジア・アフリカの現実について知る手段をもたない民衆が、いわゆる「後進国」の人間を蔑視しがちであるのは、残念ながらその地域を研究対象としている私達の無力を示している。しかし、このような論文が『アジア経済』の巻頭を飾りうる根拠はむしろ、アジア・アフリカの現実に対する無知というよりも、その現実を熟知している者の蔑視感情にあるというよりほかない。だが、この小文を記すことによって、私は岩城氏のアジア・アフリカ像や研究観を批判し、ただそうと試みているのではない。氏は大学で学問を教授されている方であり、国際経済学会で活躍されている研究者でもある。私の如きアジア研究の進め方について迷っているばかりの人間が、同氏の研究観についてとやかくいうことはないのである。岩城氏にかぎらず人はどのような後進国像でも研究観でも持つことができる。いわば、それは思想・信条の自由に類することがらである。したがって、問題は岩城氏がこのような論文を書いたことになく、それを私達の研究所の機関誌に掲載している私達自身のアジア・アフリカに対する態度にある。まず、何よりも批判さるべきは、かねてより本誌の編集について疑問をいだきながらも、全く無為に過ごし、この論文についていえば、7月号が出た段階で掲載の中止を主張することなく、みすみす完結させてしまった私自身のセイロン研究者としての責任である。あわせて、アジア・アフリカの現実に誰よりも親しく接することのできる機会を与えられているにもかかわらず、このような論文にアジア研究の成果として自らの機関誌を提供している編集委員会の同僚に対しても責任の自覚を促す契機としたい。

いうまでもなく、私達がその重責をはたし得なかったことを謝罪し、信用の回復に努めなければならないのは、両Jaya氏と本誌の読者に対してである。

補論 2

「紅茶の市場構造」問題小委員会の活動について

中 村 尚 司

周知のとおり、『アジア経済』7・8月号所収の岩城論文について同誌編集委員会内にこの問題を調査するための小委員会が設置され、セイロン中央銀行のJaya論文と比較検討の上、一定の結論を出し、それを編集委員会に報告した。この小委員会の結論を基礎にして次号の『アジア経済』に「岩城論文は研究論文ではなく、資料として扱うべきものであった」という趣旨の釈明がなされるそうである。ここにいたって、最初の問題提起者である私は、岩城論文が決して資料紹介ではないことをあらためて明らかにし、関係者各位および同論文の読者の再検討を要望したい。

1. そもそも岩城論文は3年間にわたる研究委員会の最終報告であり、資料としてアジア経済研究所に提出されたものではない。
2. 同論文の構成および叙述のスタイルが全体として資料の紹介ではなく研究論文という形式である。
3. 紹介されたはずのJaya論文について、資料の所在すなわちいかなる定期刊行物の何月号に掲載されたものであるか、まったく記されていない。
4. Jaya論文の第2～4章のみが理由を明記しないまま抄訳され、第1章については何も言及されていないので正当な紹介ではない。
5. Jaya論文を無断で（引用符をつけずに）訳出しているにもかかわらず、英国の『全国食料調査委員会第14回年次報告書』やFAOの報告書等を岩城氏自身が検討し、引用したようになっている。
6. Jaya論文の各章の結論が岩城論文の各章の結論となっている。
7. 紅茶市場に対する生産国側のとるべき4つの政策をJaya論文が提唱している部分をそのまま岩城氏自身の提案として書いている。
8. アジア経済研究所の職員としても、真実に対しては何よりも忠実であろうとされている小委員会メンバーの諸氏が、研究論文であれ、資料であれ、それがいかなる弱小国の研究者による成果であるとしても、当研究所の機関誌上では、正しくあつかわれるよう力をつくしていただきたいと願うものである。

付録 1

画像 1



手前の灌漑用井戸から揚水して、水稲、サトウキビ、唐辛子の収穫作業をする不可触民の女性労働者。バナナ、を栽培している農場の光景。

画像 2



画像 3



収穫した稲を圃場で脱穀する小作農夫妻。

画像 4



村内の雑貨店。

画像 5



満月の夜、ヴェラーラ長老が判事を務める村パンチャーヤト裁判の法廷。

画像 6



不可触民住民の住居とその屋根の葺き替え作業。

画像7



村の川原にある火葬場で、男性村民の遺体が茶毘に付されている光景。

画像8



となり村の宿舎前に立つ筆者と通訳のバズルーラ氏。

画像9



溜池に近い規模を持つ井戸からの揚水風景。

画像10



村の少女と長崎暢子氏（東京大学助手）。

画像11



自宅前に幾何学的な吉祥の文様を描く少女達。

画像12



革草履を修理している村の皮革職人。

画像13



村から約10km東南部に所在する精米所とパーボイルドライスの乾燥場。

画像14



タンジャーウル県チルパナンダルのイナムダール寺院。

画像15



圃場に約100頭のヤギを囲い、その畜糞で施肥する伝統農法。

画像16



村の子供たちに囲まれている筆者。



画像17

左から長崎暢子氏、バズルーラ氏、ムッカピライ氏（不可触民教育の創設者）、ボンナンバラム氏（現ネルー記念大学長）、ジーヴァナム氏（現ネルー記念高校長）。

画像18



夫に死別しても白いサリーを着用しない若い寡婦。

画像19



台所で幼児の世話をしながら、石臼でイトゥリ用の粉を挽く主婦。



村のヒンドゥ寺院の傍らに建立された村の歴史を記す刻文。



早朝、牡牛二頭曳きで、井戸から揚水する農業労働者。

付録 2

**SOCIO - ECONOMIC SURVEY
OF
A SOUTH INDIAN VILLAGE - 1967**

SOCIO - ECONOMIC SURVEY OF
A SOUTH INDIAN VILLAGE - 1967

Name of Interviewer:

.....

Name of Interpreter:

.....

Date of Enumeration:

.....

---oo000oo---

A. GENERAL INFORMATION:

1. Name of the Villager interviewed (and caste)
2. Name of the village (Sub-division) :
3. House Number and name of head of household : ...
4. Name of the person in actual charge of the cultural operation. :
5. Number of relatives who have gone abroad for employment (including those dead) :

B. FAMILY COMPOSITION AND WORKFORCE (STAYING WITH THE HEAD ONLY)

MEMBERS OF THE HOUSEHOLD AS AN ECONOMIC UNIT	RELATIONSHIP TO HEAD	SEX	AGE	(i) OCCUPATION	(ii) WORK FORCE	(iii) REASONS FOR NOT BEING IN THE WORK FORCE
i)				Standard reached	A. Owner Cultivator	
ii)			38	→ in school	B. Tenant cultivator	
iii)	wife	f	30		C. Agricultural Labourer	
iv)	son	m	4		D. Unpaid Family Worker	
v)	s.	m	3		E. Employee (Non-Agric)	
vi)						
vii)						
viii)						
ix)						
x)						
xi)						
xii)						
xiii)						

* NOTE:- If no apparent relationship, put NA. (Continued over leaf)

(b). MEMBERS OF HOUSEHOLD LIVING AWAY.

No & Name	Relationship to head	Place of Residence	Age	Standard reached in school	Occupation	Average monthly earning.	Average monthly Contributions	To head	By head
1.
2.
3.
4.
5.
6.
7.
8.

- 4 -

Comments regarding the domestic duties, if any, of each of the members within the economic unit:

- (i)
-
- (ii)
-
- (iii)
-
- (iv)
-
- (v)
-
- (vi)
-
- (vii)
-
- (viii)
-
- (ix)
-
- (x)
-
- (xi)
-
- (xii)
-
- (xiii)
-
- (1)
-
- (2)
-
- (3)
-
- (4)
-
- (5)
-
- (6)
-
- (7)
-
- (8)
-

C. Land Ownership and Tenure.

1. Extent and type of land owned by House hold: High land *20*.....
Low land *.....*
2. Extent and type obtained by lease:
Conditions of lease:
 - 2.1. Rent (in cash, kind or service).....per year/for entire period.
 - 2.2. Lease taken forYrs. When leased?.....Yrs ago.
 - 2.3. Occupational status of landlord
3. Extent and type obtained on a share-cropping basis:
Conditions of share-cropping:
 - 3.1. Landlord's share of crop
 - 3.2. ,, ,, ,, Seed
 - 3.3. ,, ,, ,, straw
 - 3.4. ,, ,, ,, manure
 - 3.5. ,, ,, ,, water rate
 - 3.6. ,, ,, ,, buffalo-cost.....
 - 3.7. Any other payment to landlord
 - 3.8. Occupational status of landlord
4. Extent and type of land mortgaged out:
Conditions of mortgage:
 - 4.1. When mortgaged (yrs ago)
 - 4.2. Why mortgaged
 - 4.3. If any interest payment in cash or kind being made: Yes/No.
State how much
 - 4.4. or, is the land given to the mortgagee to be used by him till repayment? Yes / No.
 - 4.5. Has the mortgagee (i.e. lender) given back the land to the Head to be cultivated on a share-cropping basis:-
Yes / No.
 - 4.6. Occupational status of the mortgagee (i.e. lender)
.....

- 6 -

5. Extent and type of land given out to tenant on lease
- Conditions on lease:
- 5.1. Rent(in cash, kind or service)..... per year/ for entire period.
- 5.2. Leased out foryrs. When leased?..... yrs ago.
- 5.3. Occupational status of landlord
6. Extent and type of land given out to tenants on a share-cropping, basis.
- Conditions of share-cropping:
- 6.1. Landlord's share of crop
- 6.2. ,, ,, seed
- 6.3. ,, ,, straw
- 6.4. ,, ,, manure
- 6.5. ,, ,, water-rate
- 6.6. ,, ,, buffalo-cost
- 6.7. Any other payment to landlord
- 6.8. Occupational status of landlord
7. Extent obtained by mortgage:
- Conditions of Mortgage:
- 7.1. When mortgaged (yrs ago)
- 7.2. Why mortgaged:
- 7.3. If any interest payment in cash or kind being made:
Yes/No.
State how much?
- 7.4. or, is the land given to the mortgagee to be used by him till repayment? Yes / No.
- 7.5. Has the mortgagee (i.e.lender) given back the land to the Head to be cultivated on a share-cropping basis:
Yes / No.
- 7.6. Occupational status of the mortgagee (i.e.lender).....
8. Total extent and type of land cultivated by Household.
High land..... Lowland
9. Any special feature regarding the change by the land reform:

AGRICULTURAL ASPECTS - 1966.

(i) Size of your holding: (acreae)

	OWNED		TAKEN ON LEASE		SHARE CROPPING	
	1st	2nd	1st	2nd	1st	2nd
(a) Lowland
(b) Highland

(ii) Extent which you have kept for your own cultivation:-

	OWNED		TAKEN ON LEASE		SHARE CROPPING	
	1st	2nd	1st	2nd	1st	2nd
(a) Lowland
(b) Highland

LOWLAND:

2. Extent cultivated?

	OWNED	TAKEN ON LEASE	SHARE-CROPPING OTHER
(i) 1st season 1966	-----	-----	-----
(ii) 2nd season 1966	-----	-----	-----
(iii) 3rd season 1966	-----	-----	-----

- 8 -

		1st SEASON				2nd SEASON			
		Lack of Water	Unsuitable soil	Lack of Labour	Other (specify)	Lack of Water	Unsuitable soil	Lack of Labour	Other (specify)
(a) Reasons for leaving part unclutivated.	Area Own-ed								
	Area Lea-sed.								
(b) Reasons for lea-ving whole unculti-vated	Area Own-ed								
	Area Lea-sed.								
(c) Difficul-ties en-counter-ed in the cul-tivation of the lowland	Area own-ed								
	Area Leas-ed.								

ii. Interviewer's comments regarding (a), (b) and (c) above:-

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

iii. If there has been a lack of water, what was it due to?

- (a) Unirrigability
- (b) Defective main/branch/field channel
- (c) other (specify)

- 10 -

6. (i) Approximate extent cultivated with seasonal crops:
- | | | |
|-----------------------------|----------------------|----------------------------|
| (a) Three-Fourth | <input type="text"/> | Names of crops cultivated: |
| (b) Half | <input type="text"/> | |
| (c) One-Fourth | <input type="text"/> | |
| (d) Less than
one fourth | <input type="text"/> | |

- (ii) Make a brief comment on the quality of the highland cultivation:
-
-
-
-
-
-
-

7. (i) Reasons for leaving a part uncultivated?

	<u>Maha</u>	<u>Yala</u>
(a) Lack of Water	<input type="text"/>	<input type="text"/>
(b) Unsuitable soil	<input type="text"/>	<input type="text"/>
(c) Lack of planting material	<input type="text"/>	<input type="text"/>
(d) Other (Specify)	<input type="text"/>	<input type="text"/>

- (ii) Comment on the situation of the land with regard to proximity to the channel:-
-
-
-
-
-

SEED PADDY:

8. (i) What was the quality of the seed paddy used by you for the last crop?
- (a) Certified seed ▭
- (b) Other (specity) ▭
.....
.....
- (ii) Interviewer's comments on the quality of the seed used:
.....
.....
.....
.....
.....
- (iii) If not, certified seed, explain why?
.....
.....
.....

9. WEED CONTROL:

If the cultivator had not weeded his paddy field, state why in respect of :-

- (a) 1st Season
.....
- (b) 2nd Season
.....
- (c) 3rd season
.....

10. TRANSPLANTING:

If the cultivator had not transplanted his paddy state why in respect of:-

- (a) 1st Season
.....
- (b) 2nd Season
.....
- (c) 3rd Season
.....

- 12 -

FERTILIZER:

11. If the cultivator had not fertilized any portion of his land, give reasons:-

	<u>1st Season</u>	<u>2nd Season</u>
(a) Not available for purchase when required:	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(b) Lack of funds	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(c) Fertilizer is not considered suitable	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(d) Other (specify) _____	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

12. PESTS:

Give a brief comment on the damage to the last crop by crab, rats, birds, wild boars, elephants etc., specifying each type reported:

.....

13. LIVESTOCK:

(i)	<u>Kind</u>	<u>Number</u>
(a)	Neat cattle <i>quille</i>
(b)	Buffaloes <i>Rs 30 /</i>	<i>(1. (8. hms) + calf</i>
(c)	Goats
(d)	Poultry
(e)	Other (specify)

(ii) If you do not rear them explain why?
 (in respect of each type, which should be specified)

.....

- 14 -

3.4. Period of growth:

- Weeding: (a) No. of hands engaged: Men
 Women
- (b) No. of days
- (c) No. of hours per day
- (d) Wage rate per day:
 In Cash : Men
 Women
- In kind: Men
 Women
- In food: Men
 Women.....
- (e) Expenses of controlling pests, drought,
 or flood etc.,
- (f) Wage rates or tax:
- (g) Ceremonial expenses:

3.5. Harvesting:

- (a) No. of hands engaged: Men
 Women
- (b) No. of hours worked per day
- (c) No. of days worked :
- (d) Wage rate: In Cash: Men
 Women
- In kind: Men
 Women
- In food: Men
 Women
- (e) Cost of constructing temporary sheds:.....
- (f) Other costs:

1st Season 2nd Season 3rd Season

3.6. Threshing, Winnowing, Collecting:

- (a) No. of hands engaged:
 - Men
 - Women
- (b) No. of days worked:
- (c) No. of hours worked per day
- (d) Wage rate: In Cash:
 - Men
 - Women
 - In kind:
 - Men
 - Women
 - In food:
 - Men
 - Women

3.7. Other costs:

- (a)
- (b)(Landlord share) In cash (rent)
In kind:
- (c) Cost of transplanting for:

	Maha:	Days:	Hour per day	Value of labour in money terms
No. of Women for uprooting:
No. of Women for planting:

- 3.8. Litigation: (a) Amount spent:
- (b) Over No. of years:
- (c) Purpose:
- 3.9. Any special feature:

- 16 -

F. COST OF PRODUCTION OF OTHER CROPS

Crop	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)
	Extent cultivated &/or No. of trees.	Gross output & value	Labour needed per year. No of days & Hrs per day	Men	Women	Cwt.	Manure Value	Amount paid landlord Qty	Value	Amount paid to co-sharers of land Qty	Value	Others shares paid Qty.	Value	
1. Plantain
2. Beetel
3. Coconut*
4. Cocoa
5. Tobacco
6. Coffee
7. Pepper
OTHER (Specify)														
8. Sugarcane
9. Groundnut
10. Chillies
11. dry land	3.m.
12.	(.86/...)
13.	m. food
14.

G. INCOME

(In respect of the last agricultural year)

I bought
 1. (i) Agricultural income from (a) Paddy
 1 buffalo 45 ago k400/- (b) Tobacco
 (c) Livestock
 (d) Other

(ii) Your comments on the reliability of the data you have recorded:

2.

INVENTORY OF DURABLE GOODS	Year of Purchase	Purchase price	Purchased on Cash - A Credit-B.
(a) Bicycle	/	24.8.92. k250/-
(b) Radio
(c) Sewing Machine
(d) Aladdin/Petromax Lamp
(e) Wall clock
(f) Wrist Watch
(g) Jewellery
(h) Cart
(i) Umbrella
(j) Torch
OTHERS (Specify)			
(k)
(l)
(m)
(n)
(o)
(p)

- 18 -

3. Occupation or employment: Head Serial No. of the Family member.
- (1) Describe nature milking in path.....
- (2) No. of days work per month 30 days (3 am - 6 am)
- (3) Earnings per month Rs. 80/- (3 pm - 5.30 pm)
4. Income from Rent:
- (1) Nature of property
- (2) Amount per year
5. Income from money-lending:
- (1) Amount lent
- (2) Monthly earnings in interest
- (3) Occupational status of persons who borrow
6. Income from land given out on share-cropping:
- (1) Quantity of paddy obtained last year Value
- (2) " " other crops " " Value
7. Income from trade or business:
- (1) Describe Nature of business:
- (2) Amount invested:
- (3) Annual or monthly earnings:
8. Gift or help received from outside household:
- (1) Amount received monthly :
- (2) Relationship to head of person who makes the gift :
- (3) What is the helpers occupation: :

I. Labour : Employment and Income
(Purpose of this section is to find out which months of the year, they are idle)

1. Serial No. of Family member.		Jan.	Feb.	March.	April	May	June	July	Aug	Sept	Oct	Nov	Decr.
No.	1.No of days in the month employed
	2.No of hours worked per day
	3.Earnings: In cash
	in kind
	in food
	4.Occupational status of Employer/s
	5.Nature of work

No.	1.No. of days in the month employed
	2.No. of hours worked per day
	3.Earnings in cash
	in kind
	in food
	4.Occupational status of employer/s
	5.Nature of work

No.	1.No of days in the month employed
	2.No. of hours worked per day
	3.Earnings: in cha in cash
	in kind
	in food
	4.Occupational status of employer/s
	5.Nature of work

J. LAND INHERITANCE AND PRESENT OWNERSHIP

If necessary write down geneological table showing pattern of inheritance from respondent's father.

- (a) Amount of land possessed by father at time of death:
 Type: High land:..... Lowland
- Location: Inside village Outside village
 (State name and distance)
- (b) Amount of land brought by mother: Type: Highland
- Lowland
- Location: Inside villageOutside village
 (State name and distance)
- (c) Amount of land inherited by respondent from parents:
 Type: Highland Lowland
- Location: Inside villageOutside village
 (State name and distance)
- (d) Dispersal of parental property: Highland Lowland:
1. Amount inherited by brothers: 1.
2.
3.
2. Amount dowried on or inherited by sisters:
1.
2.
3.
- (e) Amount land brought as dowry and/
 or inherited by wife (state which)
- (f) If land shared among co-owners state
 how shared: eg. the land is divided
 among co-sharers annually or is rota-
 ted among them alternatively or the
 produce is shared:
- (g) Account for difference between land
 inherited by husband and brought in
 by wife, and extent in present
 possession: Highland Lowland.
1. Mortgaged out
2. Mortgaged in
2. Taken away by creditor as compensation
 for debt
- Obtained from debtor as compensation
 for debt
3. Gone out of cultivation:
- Reclaimed for cultivation:
4. Given away at daughter's marriage (1)
- (2)
- (3)
- (4)
- Location: Inside village (1)
- (2)
- (3)
- Outside village (1)

K. BACKGROUND OF THE EMMIGRANT LABOURER.

1. (i) Name and Caste :
- (ii) Village of origin :
- (iii) Date when he left :

2. From what sources of income did he derive his livelihood?
 - (i) Main:
 - (ii) Other:

3. If agriculture was an important source of income;
 - (i) What crops did he cultivate?

<u>Crop</u>	<u>Extent</u>
(a)
(b)
(c)
(d)
 - (ii) Was he managerially responsible for his cultivation?

	Yes / No.
(a) Entirely	<input type="checkbox"/>
(b) Substantially	<input type="checkbox"/>

4. If he was a tenant;
 - (i) What was the form of rent he paid?
 - (ii) Did he perform any supplementary services to the landlord?

(iii) If yes, what was the nature of those services?

.....
.....
.....
.....
.....
.....

5. If he derived any income from non-agricultural pursuits,
Was he?

		No. of other employees in the concern.
(i) Self - employed?	<input type="text"/>
(ii) an employee?	<input type="text"/>

6. What were the main reasons why he left the village?

7. If he came back to the village with his family,
could he manage to make a living?

RINDAS 伝統思想シリーズは、人間文化研究機構現代インド地域研究推進事業の出版物です。

人間文化研究機構 (NIHU) <http://www.nihu.jp/sougou/areastudies/india.html>

NIHUプログラム現代インド地域研究 (INDAS) <http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

龍谷大学現代インド研究センター (RINDAS) <http://rindas.ryukoku.ac.jp/>

RINDAS ワーキングペーパーシリーズ 23

「南インド農村における農村経済調査を振り返って」

—アビニマンガラム村の事例から—

中村 尚司

2015年2月27日発行 非売品

発行 龍谷大学現代インド研究センター
〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1
龍谷大学白亜館4階
TEL : 075-343-3813 FAX : 075-343-3810
<http://rindas.ryukoku.ac.jp/>

印刷 河北印刷株式会社
〒601-8461 京都市南区唐橋門脇町28
TEL : 075-691-5121

ISBN 978-4-904945-56-8

ISBN 978-4-904945-56-8